

ポポロ力語における重層的人称・数標示*1

中本舜 (東京外国語大学); shun@nakamoto-family.org

1 はじめに

1.1 人称の多重表出 (multiple exponence)

ポポロカ語^{*2}では人称が多重表出する。(1a)では2人称が4度、(1b)では1人称が2度義務的に標示される。

- (1) a. $tik\tilde{u}^{\text{acc}} a na$
 $t\text{-}i + k\tilde{u}\text{-}L = a = na$
 HAB-VLZ: **A2**/3+eye-POSS**2=2**SG=**2**>1SG
 ‘お前が私を見る’ (Conj. A2C1)

b. $tik\tilde{u}^{\text{acc}}? a$
 $t\text{-}i + k\tilde{u}\text{-}? = a$
 HAB-VLZ: **A1**/1IN+eye-POSS**1=2**SG
 ‘私がお前を見る’ (Conj. A1C2)

先行研究は接尾辞と後接語の一部を単一のパラダイム、残りの後接語を複数標識とし、語幹交替を副次的なものと分析する (Stark 1976; Veerman-Leichsenring 1991; Austin Krumholz et al. 1995; Swanton 2005)。本発表は、(i) 語幹交替が一部の動詞クラスのみに適用され人称のみを標示する点で接尾辞と共通し、(ii) 後接語がクラスに拘らず現れ人称と数を同時に標示する点で接尾辞や語幹交替と異なる素性と値を持つことを指摘し、ポポロカ語の人称・数標示が2つのサブパラダイムを持つ重層的なパラダイムであると主張する。

先行研究に従った代名詞系列と後接語の目録は表 1、本発表の主張は表 2 のようにまとめられる。^{*3}

表1 先行研究による人称標示体系

	1SG/EX	2	3	1IN
A	\emptyset	$-a$	\emptyset	\emptyset
B	$-(^H)n\grave{a}$	$-(^H)\mathcal{I}a$	$^{-H}\mathcal{I}\grave{e}\sim\mathcal{I}e$	$-(^H)i$
C	$=n\grave{a}/\emptyset$	$=a$	\emptyset	\emptyset
POSS	$-\mathcal{I}^{(L)}$	$-(^H)^La$	\emptyset	\emptyset
複數 標識	$=n\acute{a}$ ‘1PL’, $=nt^j\acute{a}$ ‘2PL’, $=na$ ‘3PL’, $=s\tilde{e}\mathcal{I}$ ‘3PL’			

表2 本発表による人称標示体系

	1SG/EX	2	3	1IN
A	語幹交替 (§2)			
B	$-(^H)nà$	$-(^H)?a$	$^{-H}?è\sim ?e$	$-(^H)i$
C	$=nà/\emptyset$	\emptyset	\emptyset	\emptyset
POSS	$-?^{(L)}$	$-(^H)^L$	\emptyset	\emptyset
後接語	$=nà\sim =na\sim \emptyset$ ‘1SG’, $=a$ ‘2SG’, \emptyset ‘3SG’, $=ná$ ‘1PL’, $=nt^j á$ ‘2PL’, $=na$ ‘3PL’, etc.			

本発表に従えば A 系列は語幹交替のみからなり、A, C, POSS の 2 人称標識とされてきた $=a$ は動詞および名詞クラスとは独立の後接語であり、したがって後接語目録は更新されなければならない。

1.2 本発表の構成

§2 では語幹交替による人称標示 (A 系列) を記述する。§3 では後接語が動詞クラスに関係なく現れることを指摘する。§4 では人称による後接語テンプレートの存在を示す。§5 では 1 人称包括と除外の両方に *=ná* ‘1PL’ が用いられ、語幹交替や接尾辞が両者を区別することを指摘する。最後に、2 種のパラダイムの区別がボポロカ語の人称・数標示の記述に与える影響とこの現象の屈折形態論一般における位置付けを論じる (§6)。

*1 本発表の準備にあたり内原洋人、梅田遼、長屋尚典の各氏に貴重なコメントを頂いた。データや分析の間違ひは発表者に属す。

^{*2} ポポロカ語 (Popoloca, Ngiwa) はオトマンゲ語族ポポロカ語派 (Otomanguean, Popolocan) に属し、メキシコ・プエブラ州南部テワカン (Tehuacán) 周辺の 10 の村で約 2 万人によって話される。主要部標示型で、動詞や名詞が語彙的に下位分類され、動詞ないし名詞クラスによって異なる人称標示系列を取る。基本語順は VSO で、VO 言語の類型論的相関を示す。本稿のデータはテマラカユカ (Temalacayuca) 方言による。方言差はあるが、本稿の分析は基本的にどの方言にも適用できる。

*3 B 系列は動詞異形態飲み。活用 AB は音韻論的に融合した独自の表出を持つが、本発表では扱わない。

2 A 系列: 語幹交替による人称標示

A 系列は 3 つの語幹交替プロセスからなる。(i) 声調交替は 1, 2, 3 人称形 (1IN 形は 3 人称形と同形) に声調の異なる 2 つの語幹をもたらす (表 3)。複合動詞では、各語根が独立に声調交替を起こす (表 4)。

表 3 声調交替

	1SG	2SG	3
HAB-borrow	<i>tʃ-hé</i>	<i>tʃ-hé=e</i>	<i>tʃ-hě</i>
HAB-weave	<i>t-àà</i>	<i>t-aa(=a)</i>	<i>t-àà</i>
HAB-go	<i>t-hì</i>	<i>t-hi=a</i>	<i>t-hi</i>

表 4 複合動詞の声調交替

	1SG	2SG	3
HAB:mount	<i>tʃínkà+hĩ</i>	<i>tʃínkà+hĩ=a</i>	<i>tʃínkà+hĩ</i>
HAB-spill	<i>t-i+kì+tʃee</i>	<i>t-í+kì+tʃéé(=a)</i>	<i>t-i+kiʔ+tʃee</i>

(ii) 声門閉鎖反転は、3 人称 (と同形の 1IN) 形について声門閉鎖の有無や位置を変える操作である (表 5)。

表 5 声門閉鎖反転

	1SG	2SG	3
‘HAB-grow’	<i>t-aʔnkí</i>	<i>t-aʔnkí=a</i>	<i>t-ʔánkí</i>
‘HAB-go_up’	<i>t-aʔ+hĩĩ</i>	<i>t-aʔ+hĩĩ=a</i>	<i>t-a+hiʔĩ</i>

(iii) 人称に基づく補充法では、4 つの人称 (1, 2, 3, 1IN) のうちどれか 1 つが補充語幹を持つ (表 6)。*4

表 6 人称に基づく補充法

	1SG	2SG	3	1IN
‘HAB:say’	<i>tʃhãʔ</i>	<i>tʃu=a</i>	<i>tʃu</i>	<i>tʃu=ná</i>
‘HAB:eat’	<i>neʔ</i>	<i>nʔe(=e)</i>	<i>ne</i>	<i>ne=ná</i>
‘be+asleep’	<i>rí+tʃĩ</i>	<i>ri+tʃĩ=a</i>	<i>hí+hwa</i>	<i>ste+tʃĩ=ná</i>
‘HAB-drink’	<i>t-iʔí</i>	<i>t-iʔi=a</i>	<i>t-iʔi</i>	<i>t-uʔú=ná</i>

なお、POSS 系列の身体部位名詞が A 系列動詞に抱合された場合、POSS 系列の標示は保持される (表 7)。

表 7 身体部位抱合動詞

	1SG	2SG	3	1IN
‘HAB-see’	<i>t-í+kũʔ</i>	<i>t-i+kũ=a</i>	<i>t-i+kũ</i>	<i>t-í+kũ=ná</i>
‘eye’	<i>kũʔ</i>	<i>kũ=a</i>	<i>kũ</i>	<i>kũ=ná</i>

つまり、A 系列は語幹交替のみで人称を標示し (cf. メパー語)、A 系列の標示は 1 語内に複数回現れうる。

*4 数やアスペクトに基づく補充法もあるが、ここでは触れない。

3 人称・数後接語はクラスに依存しない

本節では $=a$ ‘2SG’ と $=na$ ‘2>1SG’ を例に後接語が動詞クラスに依存しないことを指摘する。まず、クラス A および C 動詞の形態とされてきた $=a$ ‘2SG’ は、クラス B を含め全動詞クラスについて現れる (2-4)。

- | | | |
|--|--|---|
| <p>(2) <i>ithi a</i>
 <i>t-hi=a</i>
 HAB-go:A2/3=2SG
 ‘お前は行く’ (A2)</p> | <p>(3) <i>tùfjʔāfĩ a</i>
 <i>t-ùfĩ^{-H}ʔa-fĩ=a</i>
 HAB-dream-B2-dream=2SG
 ‘お前は夢を見る’ (B2)</p> | <p>(4) <i>ikhǎ a</i>
 <i>khǎ=a</i>
 return(C)=2SG
 ‘お前は戻る’ (C2)</p> |
|--|--|---|

他動詞においても場合も同様に、B 系列とともに $=a$ ‘2SG’ が現れる (5, 6)。

- | | |
|---|---|
| <p>(5) <i>tʰejʔáfĩ a</i>
 <i>tʰ-ej(a)-ʔa-fĩ=a</i>
 HAB-call:A1/2-A1B2-INS=2SG
 ‘私はお前を〜で呼ぶ’ (A1B2)</p> | <p>(6) <i>njʔāfĩ a</i>
 <i>ni^{-H}ʔa-fĩ=a</i>
 pregnant-B2-pregnant=2SG child
 ‘お前はその子を妊娠していた’ (B2C3)</p> |
|---|---|

しかし、 $=a$ ‘2SG’ は前の母音が a か e でかつ長母音 (7, 8) か中声調の短母音 (9) の場合実現しない。

- | | | |
|--|--|--|
| <p>(7) <i>nĩʔa</i>
 <i>ni^{-H}ʔa(=a)</i>
 ill-B2=2SG
 ‘お前は病気だ’</p> | <p>(8) <i>tʰhĩhaà</i>
 <i>tʰhĩhaà(=a)</i>
 HAB:grab:A2/3=2SG
 ‘お前はつかむ’</p> | <p>(9) <i>intʰe</i>
 <i>ntʰe(=a)</i>
 HAB:eat:A2=2SG
 ‘お前は食べる’</p> |
|--|--|--|

つまり $=a$ ‘2SG’ は B 系列とともに現れるが (3, 5, 6)、 $-(^H)ʔa$ ‘B2’ は $=a$ ‘2SG’ の実現を音韻的に阻む (7)。^{*5}

次に、 $=na$ ‘2>1SG’ はすべての他動詞活用 (AB, AC, BC) とともに現れる (10-12)。

- | | |
|---|--|
| <p>(10) <i>tʰhana na</i>
 <i>tʰha-na(=a)=na</i>
 HAB:give:A2/3-A2B1=2SG=2>1SG
 ‘お前は私にくれる’ (A2B1)</p> | <p>(11) <i>ntátʰĩhĩ a na</i>
 <i>ntátʰĩhĩ=a=na</i>
 HAB:tell:A2/3=2SG=2>1SG
 ‘お前は私に言う’ (A2C1)</p> |
| <p>(12) <i>njʔāfĩ a na</i>
 <i>ni^{-H}ʔa-fĩ=a=na</i>
 pregnant-B2-pregnant=2SG=2>1SG
 ‘お前は私を妊娠していた’ (B2C1)</p> | |

つまり、 $=a$ ‘2SG’ や $=na$ ‘2>1SG’ をクラス依存の形態とした先行研究に反し、これらを含む人称・数後接語は動詞クラスに依存しない (ただし後述の $=nà$ ‘C1SG’ を除く)。これら後接語の唯一の機能は、ある人称・数の参与者やその組み合わせが所与の述語や被所有名詞に存在することを示すことである。

^{*5} 先行研究が ‘2SG’ をクラス依存の形態と分析したのは、B2 の後に接尾辞を持つ例がないためと考えられる。

4 後接語テンプレート

本節では、1 人称後接語の分布 (§4.1) や後接語が複数現れる場合 (§4.2) の形態論的な制約から、人称に基づくテンプレート (cf. Good 2011) を仮定することによって後接語の分布が適切に記述できると主張する。

4.1 1 人称後接語の分布

1 人称後接語のパラダイムは $=nà$ ‘C1SG’ (13) と $=ná$ ‘1PL’ (14) と前節の $=na$ ‘2>1SG’ と \emptyset の 4 つからなる。

- (13) *kúí nà fá, há?í húnťénà fá*
 k^{wH} - $uí$ $=nà=fá$ $há?í$ w^H - $hintfe$ - H $nà=fá$
 PFV-beat:A3=C1SG=M this_way PFV-do:A2/3-A3B1=M
 ‘男が私を殴った。男は私にこのようにした’ (150410-004 12:29)

- (14) *pero ha?ǎ ná nà?i, nunca hwaku?nà ná sē?*
pero ha?ǎ=ná nà?i nunca w-haku-?nà=ná=sē?
 but I=1PL no never PFV-show:A3-A3B1=1PL=3PL
 ‘でも私たち (EX) には決して見せてくれなかった’ (150316-006 20:14)

これらの後接語は人称標示系列とその組み合わせに従って表 8 のような分布を見せる。

表 8 1 人称後接語の分布

	A1	B1	C1	A2B1	A2C1	B2C1	A3B1	A3C1	B3C1
1SG	\emptyset	\emptyset	$=nà$	$=na$	$=na$	$=na$	\emptyset	$=nà$	$=nà$
1PL	$=ná$	$=ná$	$=ná$	$=ná$	$=ná$	$=ná$	$=ná$	$=ná$	$=ná$

$=ná$ ‘1PL’ は 1 人称複数に、 $=na$ ‘2>1SG’ は 2 人称が 1 人称単数に動作を行う場合に必ず現れ、分布が形態統語論的に一貫する。一方で、 $=nà$ ‘C1SG’ は C1SG があかつ $=na$ が現れない時に現れ、形態統語論的に一貫しない。本稿では $=na$ と $=nà$ が形態論的に同じスロットを占め $=na$ が $=nà$ に優先されると分析する。

4.2 後接語が複数現れる場合

3 人称後接語が複数現れると、 $A>P/R>T$ の順に並ぶ。(15, 16) は同じ 2 者が違う順に並べられる例である。

- (15) *şə? wàke?e ntù fǎ*
 $şə?$ $w-àke?e$ $=ntù=fǎ$
 job PFV-put:A3=HONM=CHILD
 ‘男が子供を働かせた’ (150410-004 08:22)
- (16) *kújǎ fǎ ntù*
 k^{wH} - $ujǎ$ $=fǎ=ntù$
 PFV-beat:A3=CHILD=HONM
 ‘子供が男を殴った’ (ibid. 05:04)

しかし、異なる人称の後接語の間では、順序が常に $=2=1=3$ となる。 $1>2$ と $3>1$ を (17, 18) に例示する。

- (17) *şù?ǎ ?ù tsin?u?á n?ǎ ná* *nákú ?ù*
 $şù?ǎ$ $?ù$ $ts-in?ù-?á=n?ǎ=ná$ *ná-kú* $?ù$
 nothing fruit POT-leave-A1B2=2PL=1PL one-RST fruit
 ‘私たちは果物の一つもあなたに残さない’ (151010-000 02:12)

- (18) *níi* semana *k^whí ntù* *hwífi^húntfe^sùh^hnkà ná ntù*
níi semana *k^wH-hi=ntù* *hwífi-w^H-hintfe-^sùh^hnkà=**ná=ntù***
 three week PFV-go:A3=HONM PURP-PFV-CAUS-get_frightened=1PL=HONM
 ‘彼は 3 週間 (出稼ぎに) 行ってて、私たちをおどろかしに来た’ (150608-002 49:58)

この他に、総称指示の=*ni* ‘GEN’ は 1, 2 人称と共に起する例がないが必ず 3 人称後接語に先立つ (19)。

- (19) *ntfe²a ni* *nana; súh^huntfe^ké²è ni na,* *sú^kí²í²há ni*
ntf(e²)e-²a=ni *nana sú^h-^Hw-hintfe^k(^áí²)^hé²=**ni**=na,* *sú^h-^Hk^w-í²í²há=ni*
 HAB:do:A3-NEG=GEN VOC IRR-PFV-teach:A2/3-A3B3=GEN=3PL IRR-PFV-learn:A3=GEN
 ‘もうしないんですよ。教えられさえすれば身につけていたであろうものを’ (150708-002 49:17)

3 人称と異なり 1, 2 人称や GEN の分布は形態統語論的動機を持たず、テンプレート (表 9) を必要とする。

表 9 後接語テンプレート

=2	=1	=3
= <i>a</i> ‘2SG’, = <i>nt²á</i> ‘2PL’	= <i>nà</i> ‘C1SG’, = <i>na</i> ‘2>1SG’, = <i>ná</i> ‘1PL’	= <i>na</i> ‘3PL’, = <i>sé²</i> ‘3PL’, = <i>há²</i> ‘HONF’, = <i>fá²</i> ‘CHILD’, etc.
= <i>ni</i> ‘GEN’		

つまり、後接語の記述はスロット内でも (§4.1) スロット間でも (§4.2) 形態的テンプレートを必要とする。

5 1 人称複数の標示

ポポロカ語は、接尾辞や語幹交替による 1(SG/EX) と=*ná* ‘1PL’ で 1 人称複数除外を、3 ないし 1IN と=*ná* で包括を表す (20, 21)。補充法がある場合や専用の接尾辞を持つ B 系列を除き 3 と 1IN は同形となる。

- (20) a. *itshā² ná* b. *itsu ná*
tshā²=ná *t²su=ná*
 HAB:say:A1=1PL say:A2/3=1PL
 ‘私たち (EX) は言う’ (A) ‘私たち (IN) は言う’ (A)
- (21) a. *nùnà ná* b. *nùì ná*
nù-nà=ná *nù-i=ná*
 know-B1=1PL know-B1IN=1PL
 ‘私たち (EX) は知る’ (B) ‘私たち (IN) は知る’ (B)

接尾辞や語幹交替によって区別されない場合、包括と除外は同形 (syncretic) となる (22-24)。

- (22) *tàà ná* (23) *stee ná* (24) *it²hé ná*
t-àà=ná *stee=ná* *t²hé=ná*
 HAB-weave:A1/3=1PL be:PL=1PL HAB:cough(C)=1PL
 ‘私たちは織る’ (A) ‘私たちはいる’ (A) ‘私たちは咳をする’ (C)

ポポロカ語の 1 人称標示における語幹交替・接尾辞と後接語の組み合わせは表 10 に要約される。

表 10 1 人称標示

↓後接語 \ 語幹交替と接尾辞 →	1SG	1IN (3)
=ná	1 人称除外複数	1 人称包括複数
∅	1 人称単数	— (3 人称)

1 人称複数の標示において接尾辞や語幹交替は 1 人称包括を人称素性の値として持つが、1 人称包括を標示するには後接語を必要とする。一方で、=ná ‘1PL’ は人称素性が未指定で、包括・除外が解釈されるためには接尾辞や語幹交替を必要とする。つまり、接尾辞や語幹交替と後接語のパラダイムは相互依存の関係にある。

6 結論

以上に示した通り、ポポロカ語の人称標示は (i) 動詞ないし名詞クラスごとに異なる接尾辞や語幹交替のパラダイムと (ii) クラスに依存しない後接語のパラダイムからなる重層的な体系である (表 11)。

表 11 ポポロカ語の人称標示における 2 つのシステム

	接尾辞と語幹交替	後接語
素性と値	人称 (1SG/EX, 2, 3, 1IN)	人称 (1, 2, 3)・数 (SG, PL)
実現の制約	動詞ないし名詞クラス	音韻論と形態論的テンプレート
複合動詞	複数回現れうる (語幹交替)	1 度のみ

ポポロカ語の人称・数標示が 2 つのサブパラダイムからなると分析することは、この言語の多重表出や同形性の解明に寄与する。また、屈折形態論一般に対しては、語幹交替による人称標示 (A 系列; §2)、屈折クラスと動詞クラスの区別 (§2, §3)、形態論的テンプレート (§4)、morphomic (§2) な同形性や有方向的 (§5) 同形性 (cf. Stump 2016:ch. 10)、パラダイム内のサブパラダイム (§5) などの例を提供する。

参考文献

- Austin Krumholz, Jeanne, Marjorie Kalstrom Dolson, and Miguel Hernández Ayuso. 1995. *Diccionario del popoloca de San Juan Atzingo*. Tucson: Summer Institute of Linguistics.
- Good, Jeff. 2011. The typology of templates. *Language and Linguistic Compass* 731–747.
- Stark, Sharon. 1976. The verb word of Northern Popoloca. *SIL Mexico Workpapers* 2:1–73.
- Stump, Gregory. 2016. *Inflectional paradigms*. Cambridge University Press.
- Swanton, Michael. 2005. Split intransitivity in Otlaltepec Popoloca. Presented at “Typology of Stative-Active Languages”, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Leipzig, May 21.
- Veerman-Leichsenring, Annette. 1991. *Gramática del popoloca de Metzontla: con vocabulario y textos*. Amsterdam: Rodopi.

略号一覧

1 2 3 (人称); SG PL EX IN (数と包括); A B C POSS (人称標示系列); GEN M HONM HONF CHILD (その他後接語); HAB PFV POT IRR (TAM); INS 道具アプリカティブ; PURP 目的兼移動; RST ‘only’